

平成二十七年二月十日発行  
皇學館論叢第四十八卷第一号 抜刷

秦恒平「秘色」論——あやかしの連環——

永  
栄  
啓  
伸

## 秦恒平「秘色」論——あやかしの連環——

永 栄 啓 伸

### □ 要 旨

「秘色」は太宰治賞受賞後の第一作と言われている。その出発から秦恒平は〈正統的〉ではあるが〈特異〉な作家と評された。現代の潮流から外れた作風であったからである。

その理由の一つに、歴史や古典文学、古典芸能などに造詣がふかく、趣味の域を越えて専門的である点が指摘できる。この作品も、天智天皇の近江大津京への遷都から壬申の乱までを背景にして、大海人皇子と額田姫王の間に産まれ、夫大友皇子との間に葛野王を産んだ十市皇女の謎にみちた生涯を考察しながら、〈貫い子〉という自己の境遇を重ねることと、〈親さがし〉という主題を浮かび上がらせている。しかし父を問い、母を恋うることは、〈夫と呼ばせない男〉の子を産んだ女という暗い感情の連鎖でもあった。十市幻想と現実との二重の構造のなかで、それらがどう切り結ぶのかを検討するために、具体的には、新幹線に乗り合わせた女性と滋賀県の堅田の当来寺（幻花庵）の尼との関係や、遺跡発掘のとき滞在した青年技師と山田家の不透明な人間関係、さらに鞠子（まり子）という少女に幻惑されながら十市幻想を追う「私」を妖しく取り巻く幻想の二重性を考察した。

### □ キーワード

秦恒平 秘色 十市幻想 貫い子 幻想の二重性

## (1) 作品の背景について

この作品は「展望」(昭和四五・三)に掲載された。秦恒平は「本来のこれが太宰治賞受賞第一作となっている」こと、そしてもう一つは、雑誌「淡交」の「近江大津京」に関する記事に触発されたことを、『湖の本3 秘色(ひそく)・三輪山』<sup>(注1)</sup>の自解「作品の後に」で触れている。当時「淡交」には、それに関する記事としては、昭和三十九年一月号に村井康彦「大僧都永忠——入唐僧と茶の将来」があり、天智天皇が遷都した翌年に滋賀里に建立された崇福寺や、梵釈寺の記事があり、付近の略図もあってわかりやすい。しかしこれは作品にも述べられている永忠ら入唐僧に関するものである。それよりむしろ、同社から刊行された原田伴彦『近江路人と歴史』<sup>(注2)</sup>に関わりがありそうである。(第三章 帰化人の里) および(第四章 志賀の古京)が参考になる。そこには遷都から天智天皇の死、壬申の乱そして上記の寺跡について言及があるので、作品の背景を知るうえでも、その一部を引用してみたい。

六六七年に中大兄皇子が、大和の貴族や官人の反対を押しきって、都を飛鳥から大津に移して即位した。その経緯や理由について次のように述べている。

この遷都の四年まえ、朝鮮に出兵していた日本は、朝鮮の白村江で唐の水軍と戦って大敗し、日本と友好国であった百済が滅亡した。(略) 天皇は唐と和親する政策に転換するとともに、一方では唐からの圧迫を警戒するために、西方からの攻撃に対して大和よりははるかに安全な近江をえらんだとみられている。それとともに、天皇は、改新事業の仕上げと内政の整備を企てた。(略) 国防上とともに、内政の一新という点にあったとすれ

ば、天智天皇を近江に誘引した一因として、この地の帰化系豪族の力が働いていたものではあるまいか——というのが私の想像なのである。(略)遷都の二年後の六六九年には天皇の柱石の臣であった藤原鎌足が死に、六七一年にはかんじんの天皇が病いにかかった。このとき天皇がいちばん悩んだのが後継者の選定であった。天皇は長子である太政大臣の大友皇子を皇位につけるつもりであったが、その生母が伊賀出身の采女で身分が低く、宮廷には反対者が少なくなかった。大友の対抗者は天皇の同母弟の大海人皇子で、大海人は豪族や官人からの信望が厚かった。六七一年十月、意を決した天皇は、大友を皇太子とした。大海人は政界を引退することにして、出家して吉野に去った。(略)十二月、ついに天皇は死に、大友皇子が皇太子として政治をとることになった。だが政局は安定しなかった。大津がわと、吉野にある大海人皇子との対立はしだいに緊迫し、翌六七二年六月、ついに両者の間の戦いはじまった。世にいう「壬申の乱」である。

大津京は陥落し、大友皇子は自死したがその地が特定できないこと、長等山だという説があること、また大友の首は大海人のまえに捧げられが「このとき大友の妻の十市皇女は大友と死をともしせず父の大海人のもとに逃げかえった。父と夫が戦うのを目前にした彼女の心境は悲痛であつたろう。しかし彼女は大海人がわのスパイの役割を果たしたのだろうとも推測されている」と記されている。

このような歴史的背景を一つの軸にして「秘色」は書かれた。秦作品の特徴の一つは、こうした史実や古典を丹念に読み解き、その背後にほの見える疑念や謎を追求しながら、作者自身の内発的な問題と重ねて形象化するところにある。その点で「秘色」の構成は、主人公「私Ⅱ当尾(とおの)」が大津京跡に興味を持ち、特に十市皇女にまつわる史実を調べ、山田家の謎にたどりつく作品内の〈現在〉の経緯と、壬申の乱前後の〈史実〉とが二層の構造になっ

て関わり合っている。では作者の内発的な問題とは何なのか。やや先走って言えば、〈貫い子〉という自らの境遇から発する〈親さがし〉のテーマであろう。しかし厄介なのは、この二層の構造が醸成する世界に生じる混沌に立ち向かわねばならないことである。その読解の困難さは、言葉や構成のありかたについて述べられた次の評言にも見受けられよう。「清経入水」で太宰治賞を受賞後、「秘色」をもって新潮社出版部の宮脇修を訪れ批評を乞うた折り、次のような発言があったという。作者自身の要約から一部を引いてみる。

君の日本語は、一語一語がその場で明確にイメージを結ばず、あたかも石くれのようにバラ撒いて行かれ、ところが、作品の進行につれてそれらがいつかジワジワと遅ればせにいたるところで光りはじめ。意味を持ちはじめ。そしてお互いに乱反射しあうようになる。すくなくともそれは近代文学の大勢とは相容れない性質の営みであり、はなはだ分かりにくい方法である。いや方法であるのかどうかも分らない、つまり支離滅裂ということになる。（『湖の本3』・「作品の後に」）

この個所は「秘色」の特徴をうまく言い当てている。作者の言う〈「時間差」手法〉である。それは多かれ少なかれ小説を書く手法の一つであろうが、秦作品においては、史実を作品の現在の時間のなかに、交互にあるいは重層的に混入させることで、そこに謎めいた時空を生み出し、それがすぐには「明確にイメージを結ばず」、最後に行くにつれてそれぞれ絡み合い「意味を持ちはじめ」。それだけに、われわれ読者は執拗かつ注意深く丹念に絡みついていかねばならない。

さらに背景として、上記の原田伴彦の史実の記述に加え、作品内に見える次のような人物構成も確認しておく必要

があるだろう。

近江大津京に移した天智天皇には長子に大友皇子がいた。また天智には実弟大海人皇子（のち天武天皇）がいて、額田姫王との間にすでに十市皇女が生まれていたが、額田は天智天皇に召されて後宮に入った。大海人皇子の王妃は、天智の娘である鸕野皇女（のち持統天皇）であり、草壁皇子が生まれ、その子に軽皇子がいる。大津京へは、大海人皇子、鸕野讚良皇女、大友皇子、額田姫王、中臣鎌足らが供をして移る。やがて病に伏した天智天皇は、しきたり通り大海人に譲位することを望まず、我が子大友皇子に譲ろうとする。危険を知った大海人は都を離れて吉野に身を隠す。天皇は大友皇子には、大海人と額田の娘である十市皇女を結ばせ、やがて葛野王が誕生する。天智天皇が病死したため、大津京は五年だけの遷都となった。

作者が光をあてるのは、その全貌が謎に満ちて伝承される十市皇女（とおちのひめみこ）の不可解な生涯である。

## （2）作品集『秘色』の評価

「秘色」をはじめ、「清経入水」「蝶の皿」「畜生塚」を収録した、初の単行本『秘色』（昭和四五・五 筑摩書房）が出版されたとき、進藤純孝は書評で「青磁の盃の美しい肌につられて、新幹線でとなり合わせたもの静かな婦人や、近江朝の美しい皇女の身の上を夢想し、もの狂いに身をまかせる物語<sup>(注3)</sup>」と紹介し、さらに「中日新聞」<sup>(注4)</sup>では、梗概と物語の仕組みを記したあと、「今を語るかと思えば昔、昔を語るかと思えば今——十市皇女の妖を語るかと思えば、小紋の風呂敷を忘れて去った滋賀里の婦人の残り香に移り、生き難い今の世を指すかと思えば、飛鳥の世の暗部に筆をひたす。こうした語りように慣れぬ読者には、ずいぶんとわずらわしい小説だが、ふと気づくとそのわずらわしさ

が、夢ともウツツとも知れぬ今昔わかたぬ想念の世界を息づいているのである。」と、作品の特徴と幻想性の構造について述べた。

また桶谷秀昭は、この作品群が現代小説が欠如しがちな〈芸術〉性をもち、〈反時代的な断念の志〉の後に得た伝統的な〈奥深い表現〉がある、として次のように指摘している。<sup>(注5)</sup>

伝統に直面する詩精神は、今日の現代詩に稀であり、小説も同様である。むしろそれとの格闘なき訣別にみずからの存在理由を求めているかのようだ。今日の日本の散文は猥雑の異名の如き観を呈している。

社会も国家も文化も私の現実ではない、とは「畜生塚」の主人公の言葉だが、かかる反時代的な断念の志が、現実にあいわたるほとんどすべての橋を焼いた果てに、いちばん根本に日本の文化の奥深い表現を自分のものになっている。

作者の日本古典の教養、古事来歴のせんさくは、趣味に淫する瀬戸際の危うさにまでいくことがある。「秘色」がそうである。

これは宮脇修の評言に通じるところがあつて興味深い。つまり現代小説においては認められたいほどの古典や歴史への深い造詣に支えられた、伝統的な芸術を追求した作品だと評したのである。そして同様に、その作風を〈特異な体質〉として注目し、〈正系の美意識〉と評したのが、笠原伸夫<sup>(注6)</sup>であつた。

もつとも〈特異な体質〉などというが、それは日本文学の伝統に対して、異形、異端と呼ばれるべき作風だと

いうのではなく、むしろ逆に、日本人の精神風土の伝承した正系の美意識にたつ、美しく豊かなイメージの充溢する世界なのである。

つまり、王朝文学的な感覚、観念に圍繞されつつ、同時にそこに現実のあわただしさの生活の断片を縫いあわせながら、観念と現実、夢幻と実際、古典と現在とを巧緻に織りなすのである。その意味では表題作「秘色」は、観念と現実、夢幻と実際とがきわめて人為的に綾なされた一編で、なにやら妖しく凄絶な〈美〉の世界を、いとも鮮やかに突出させている。

本来、正統であるはずの王朝文学からの流れが、現代ではむしろ異端におかれている現状を指摘しつつ、夢幻と現実が作り出す〈美〉に賛意を示した。逆に、その幻想の手法について鶴岡冬一は「この作品は数々の際立った素材の面白味で十分読ませるが、『清経入水』ほど作者自身の内面性が刻まれていないのは遺憾」と言い、「その過程における幻想の叙述がより以上創造的であるためには、著者自身の内面的なもの、いわば「顔」をもっと強く持たなければなるまい。考証が考証の面白味のみで終り、歴史の中の自己ときりむすぶことがゆるければ、いわゆる現実と幻想の関係は生きてこない」と述べた。

いずれにしても、秦恒平は、その出発から、現代文学における〈正統的〉かつ〈特異〉な作家として迎えられたのである。それらの点に留意しながら、夢幻と現実が、具体的にどのようなように切りむすび展開されていくのか、その内実を検討してみたい。



### (3) 〈夫と呼ばせない男〉の子を産む女

さて、作品にそって話を進めると、医学書の出版社の社員である「私」は、〇大学の平沼教授の出版記念会に招待されて大阪に向かう新幹線のなかで、「四十にすこし前かという和服」の女性と隣り合わせ。滋賀里へ帰るところから、彼女の出身地であることがわかる。「私」が大津京跡に関心を持つのは、二ヶ月前の二月末に、旧家、居初家の庭園を見学に来たとき、堅田の当来寺を紹介されて立ち寄り、その折り、寺の経営となる幻花庵に宿泊していたからでもある。

幻花庵は幻想(夢)の場としてきわめて重要である。十市幻想の起点となっている。したがって作品構成上、当来寺の石仏だけでなく、当主の尼が十市皇女と何らかの関連があるらしいと考えるのが妥当である。「私」は給仕をしてくれた咲さんに、尼さんが小学校の先生をしていることを教えられ、話すうちに「堅田鮎の包み焼」は出ないのかと聞く。これはへいにしへはいともかしこし堅田鮎つつみ焼きなる中のたまづさ」という鎌倉時代の書物にあるこの歌が、十市皇女に関わる意味を含み持っているからであった。それは、近江大津京を興した天智天皇の死期がせまるなか、子の大友皇子(十市の夫)と、弟の大海人皇子とが帝位をめぐって緊迫した気配がみなぎったとき、危険を察して吉野にのがれていた大海人(十市の父)にむけて、十市は都の動向を知らせ、決起を促す書を鮎の包み焼の腹に隠し入れて送ったという逸話を想起したからである。

まず謎めいて登場する当来寺の尼さん(山田道妙とのちに判明する)は、咲さんによれば、大学の寮生活をする娘が

いて、週末は帰宅するという。二人によるピアノの連弾が夜遅くに幻聴として聞こえてくる。

何で出家したんだろう。大学へやるほどの娘をどんな事情で産んだのだろう。(十二)

出産、出家、何があったのか——幻花庵で眠れぬまま「私」は想像をたくましくしながら電灯を消す。すると続いて、幻想(夢)として、大友皇子と十市皇女の結婚とその夜の出来事、そして葛野王の誕生のいきさつが語られる。まず、この尼さんの〈過去〉への疑問を契機として、十市の幻想が生まれるという序列に注意しておきたい。

十市皇女と大友皇子との婚姻が天智天皇の意思でおこなわれたとき、「故事拾遺」からの、驚くべき「憶測」が語られる。すなわち「大友は年は十市に一歳若く、真榊のような皇女の夫にふさわしい、端正な容貌と温雅な教養を備えていた。しかし一部には早くも高慢かといわれていた美しいこの乙女は、この結婚をも冷淡に拒絶した」が、「ついにやむなく大友皇子に娶された夜、皇女は忽然として大友のもとを脱け出た」。「半刻ばかりして戻った皇女は折りからの豪雨に全身滝のような雫を垂らしたままであったが、何よりも異様なのは十市の中からだにたちこめた耐えがたい腐臭であった。大友は露わに不快を示してからだを清めるよう命じたけれど頑なに口を噤んで新婦は褥に座して動かなかつたので、堪りかねて大友は去り、夫婦交会の事はその後二人にはなかつたと謂うのである。しかも皇女は次の年葛野王を産んでいる」。「故事拾遺」はこの経緯を「十市が飛鳥の淵瀬に仰臥し、雨中の闇に黒き事墨の如く大いさ牛に似た妖怪と交わって懐妊したのだと妄想を敢てしている」と記している。もっともこれは真相を語らぬための記述であろう。妄想に過ぎぬというが、さらにもう一つ、そのような状況下で、十市の産んだ葛野王が、実は大友皇子の父「天智の子とする執拗な憶説」がある。先だって天智が「十市を娶す意志があることを告げた」(十)ともあり、

「正妃倭姫王に皇子がなかった」（十）ことを思えば起こりうる事の運びと言えるかもしれない。

壬申の乱のあと錯乱した十市皇女の最期を、「飛散炎上」とも「狂死」とも伝える記述があるが、主人公はその死について、十市皇女には特異な巫女の資質があり、浦島太郎や、柳田国男の著述にある（鹿島さまのおめかけになると、いつ迄も十七の姿で居たつてなア。それで鹿島様からおひまが出ると、急に五十にも六十にもなって、齒がすっかりかけたり白髪になったりしたつてなア）を引き、同様の超常現象のような急激な変化が十市にも起こったのではないかと推測している。

ともあれ、壬申の乱や十市皇女の悲劇に思いを馳せるとき、「私」は、誣術にたけたこの少女を（天人の五衰の如く急激に死なねばならぬ崩壊のたねを宿していた）と解するよりほかに納得できないのであった。それは兄弟間の権力闘争のなかで、生まれ、母を奪われ、父と夫の間で翻弄され、狂死したと伝えられる皇女が担う運命であった。

また、葛野王の伝の冒頭に、「王子者。淡海帝之孫。大友太子之長子也。母淨御原帝之長女十市内親王」とある簡素な出自の記事を併せ想う時、さまざま不思議というか、我が身の上にも事寄せて苦々しい宿世ふうの感懐を私は禁じえない。伝は果して事実を伝えているのだろうか（八）と記すとき、先に見たように、大海人皇子と額田姫王の娘である十市皇女が、とりわけ「私」の関心を惹くのは、自分を産んだ母、額田姫王が幼少時に天智天皇によって召されたという事実、つまり母を奪われた存在であり、また「憶測」が正しければ、その母を奪った（父）によって犯され、葛野王を産んだ存在だからであろう。つまり出生に関わる「暗く妖しい部分」（八）にあると察せられる。

ここで、十章に見える十市皇女の出自にふれておくと、十市は「三輪山の真西約一里」にある地名による。母の額田姫王には姉鏡王女がいたが、十七歳のとき、この十市の地で密かに出産した。大化二年（六四六）であった。母の

ような「文芸の才」ではなく、「一種凄絶な誣術と天文に力倆をみせた」という。古来葬地であった「土蜘蛛伝説に無気味に彩られたこの忍坂」で額田姉妹も十市も育った。母を奪われ、「幼い十市はいつか母の姿を忍坂の里に見えぬ事を、苦い想い出として心に刻んだ」そして「神を寄せ、神のこぼれを語り、雷鳴とともに雲雨を遠く飛鳥の京に飛ばす術をも覚えた、中でも怪火を弄する業に於てこの少女は一種卓越した感受性を備えていたという。」十二歳のとき、美しい歌を教えられることもなく、天智天皇への怨念を秘めて飛鳥朝に出仕したのであった。

では、この十市皇女がなぜ「私」の親さがしに関わり合うのだろうか。

「我が身の上にも事寄せて」とあるように、当初、自分が〈貰い子〉であったことを知らされなかったのと同様、「伝」の記載も表面上取り繕われたものではないかと疑念を抱くのである。真相を知るきっかけとなった、義父母から偶然耳にした「堅田」という地名や、さらに中学生のころ見た「寒かったあの師走の午さがりに、父と母は何を話合っていたのだろう」と自分に問いかける原風景が、「私の、非現実」を聞く小さな光る鍵となつて「主人公を揺さぶる。つまり「自分を産んでくれたその母を知らない。産ませた男を知らない。その以前から、私の頭にはいつとなく、父とは言わせぬ男のうしろを、重い足をひいて行行く母のイメエジが、できていた。みなが隠していたけれど、神経質な子どもの眼や耳がそうは塞ぎ切れない事を人のいい今の父も母も気づかなかつたらしい」(二)と述懐される〈生みの母〉をめぐる、以下のような「暗い血の渦を覗く脅え」との呼応に明らかである。

「私」は、戸籍によれば滋賀県能登川村の「山田太郎の家でふくを母として生まれながら、即日私一人の新戸籍を京都市右京区西院乾町四十九番地に設けられ」、やがて「東山の麓の、義理ある今の両親の家に迎えられたらしい」と、〈貰い子〉としての自らの出生を明かしている。高校生のころ勇氣を出して母を訪ねてみたが、「口ごもるだけの老夫

婦」に会い、「ふくと名告ってくれた人を見て即座に母でないと信じた」とも記される。この屈折した微妙な心理は次のように述懐される。

生みの親を恋しいと思うのではない、と思えば思うほど絡まり寄ってくるものがあつた。何かわからないそれに催されて妻とも逢つた。子をもつた。勤めの傍ら小説というものに書いてでもその気持ちを処理しようとした。だが、どうかきまわしても絵にならない暗い血の渦を覗く脅えは思いを去らない。(八)

生みの母を恋しいと思ひながら素直に受容できず拒絶する心の葛藤、アンビヴァレンツとも呼ぶべきものであろうか。夢のあとの「渴くほどの物足りなさ、人恋しさ」(十二)と、血縁を知ることの脅えとの葛藤は、ためらいがちに母を模索する「私」に、安易に母恋いとは言えぬ重苦しさを齎している。

それでも、事情を知る友人黒田との会話のなかで、「君は今でも実の親を知りたいのか」(九)と尋ねさせ、「私」の夢のなかでは、「三人で同じ歌を今度は終いまで唱つた。眼を真直ぐうみづらに注ぎ、だが両横に父と母との若い肌を感じながら私は大声で唱つた。二人の顔を見る事はできなかつた」(十二)と哀しい涙を流させているところを見れば、作品の流れは、親さがし、あるいは母恋いに向かつている。前述のように、幻花庵で尼さんの出家と娘の出産の事情を忖度したあと、十市皇女の太友皇子との婚姻のくだりを記し、さらに翌朝に幻花庵を去るとき、すぐ後ろから、同宿した「暗い眼をした」「六十年輩の男」と「二十七、八の女」の、明らかに「夫婦、親子でない」二人が出てくるのを見る。女は妊娠しており、男になにか声をかける。「私」にはそれが「腹の子を産みたい」と言つたように聞こえて合点する。次いで「あの女は老人の子を産むのだろうか、産まれる子どもの事を、考えているのだろうか

か」と考え、さらに「やはり産むのだろうか、産むなら無事だと」重ねている——この展開は、底流に母恋いのテーマを宿す可能性を窺わせる。しかしそれはあくまで、〈夫と呼ばせない男〉の子を産む女の、暗い感情の連鎖であったことは注意すべきである。

#### (4) 幻惑する〈風呂敷〉と〈まり子〉

新幹線での滋賀里出身の女性は、「白地に染め抜いた小さな「王」の文字」のある「綺麗な風呂敷」を置き忘れて京都で降りた。気づいた「私」は、あわててホームにその姿を見つけたとき、婦人と一緒の娘に出会う。「相手の娘もこつちを見て、微笑った。髪が動いた。娘の顔を見たたん、おつと声に出て、訳もなく私は身を退いてしまった」。この反応に注意しておきたい。末尾で、ひとりの〈娘〉と出会う反応と比べたいからである。いまホームにいるその娘は、十年前、学生時代にのちに妻となる恋人と、比叡山ドライブウェイを越えて崇福寺跡を訪れたとき、不意にあらわれて「一枚のまるい金属」をくれた「まりい」という名の六、七歳の少女を想起させる。この銀色の黒い一枚は、発掘された崇福寺跡から出土した十二枚の「無文銀銭」のうち、行方が知れぬ一枚ではないかという謎を含ませながら物語は進められるのだが、この発掘に関わる一つの事件が挿入される。新幹線のその女性は次のように話す。

今から三十年くらい前、滋賀県と京都大学が協力してこの廃寺を発掘した際、塔心礎の舍利孔から他の出土品と一緒に、ヒビ一つない無きずの越州青磁が見つかったとか、しかも何らかの事情で一夜のうちにそれが紛失したとか、熱心な物数奇の話を一度となく耳にしたのだけれど果してどんなものだろうか、と。(三)

この青磁こそ、王家や貴族が大事にして隠し持ち、一般には公開しなかったので「秘め隠された珍重された色やいうて秘色」(九)だと平沼教授は説明する。それは青磁そのものにとどまらず、ここでは「秘め隠された」人間関係と読んでもいいかと思われる。

平沼教授によれば、この時、測量にたけた某青年技師は「地元の某氏の家に起居を俱にしつつ、青年はおよそ暮から春へかけて南滋賀と滋賀里の二廃寺跡の精密な実測図を作りあげた」。しかしこの青年と「青年に宿を貸していたやっぱり遺跡発見に熱中気味の某氏」が、調査団の許可なく「金銅の外箱」を掘り出してしまった。素人の作業ゆえに、発掘の様子が再現できず、その上、出土した無文銀銭が十一枚か十二枚かがわからなくなってしまったのである。これは事実らしく当時の新聞にも載った騒がれた事件だという。二人は警察で厳しい取り調べを受けたが結局なにもわからなかった。

青年は死んだ、と素っ気なく述べられるが、青年と、宿を貸した某氏と「まりい」とはどのような関係にあったのか。そのためには作品の末尾にむかって、次第に明かされる〈山田家〉の存在に注視しなければならない。

大津へ帰る電車に、幻花庵の尼さんが追いついて乗り込んできた。「綺麗な紫の風呂敷包み」を抱いている。「滋賀里の妹のところへちよっと用事がございまして」と言うところから、新幹線の女性と姉妹らしいことが推測される。山田道妙という名も聞いた。江若鉄道の滋賀という駅で別れ、「私」は十市の墓らしきものが、長等下の大友皇子の墓である弘文御陵の近くにあると聞いて出かける。

崇福寺跡から下つてくると「角の向うむきに、十七、八か、女の子が立っていた」ので、「王さん」の家を聞いた。すると「それやったら中国の人やないですよ。きつとおおきみさんの事やと思いますけど」と〈まりいちゃん〉と思

しき女の子は答えて、二つとならない男の子とともに大きな屋敷に入ってしまった。表札が見えて「姓は大きく山田だが、間違いない中にはつきり鞠子、の名も」存在したのである。聞いたところ、王さんとは「ただの山なみ」を指す呼称だという。しかし単に山なみを指す呼称を、風呂敷に染め抜くというのも、いかにも不自然である。

不透明な事実と人間関係について、最終章（十五）では、謎ときに似た事実がいくらか提供される。京阪滋賀里駅の「線路わきのパン屋」の主婦が語っている。

「おばさん、あそこ掘り出した時分のこと知ってる」

「こどもやったしわたしはよう知りませんけどな。この上の人が何や、仰山掘り出したいうて」

「へえ。それで」

「それで、警察が来たそうですが」

「ね、ね、その人の苗字知りませんか。王さんとかじゃない」

「王さんとは違いますかな」と笑って、「苗字な——。ええと苗字が山田さんいうたでっしやるか」

遺跡の発掘に協力したのが山田家であったことが判明する。そして山田家は「農家」ではなく、「近所のなみの家」とはよほど違っていた。由緒ある旧家——歴史に関わることを家構えが物語っている。

また長等山の御陵を訪ね、大友皇子の墓か、と思い、ここが新羅崇福寺かと気付き、御陵守りのじいさんに案内された新羅明神は「明神と住まいの間にはへだてもなかった」。勝手口には「まだ新しい女乗りの自転車」が見え、「主人らしい五十年輩」の「大津市の中学の教師」である男性が応対に出る。王さんではないかと尋ねると「お、お、お、みさ



んというのは、前の、弘文天皇御陵のこの辺での呼びならわしだ」と教えてくれた。指さした表札には山田正友。「声をききつけて十六、七の娘」が顔を出す。その時の「私」の印象は記されない。彼女は崇福寺からの帰りに出会った「十七、八か」の「ワンピース」の女の子と同じ子だろうか。京都駅のホームで見た、微笑する〈娘〉との反応のちがいに注目すると、同一人物とも思えない。すると、道妙の娘の大学生だろうか。やがてその娘が「稽古事か着物姿で出てきた」。その場面は次のように描かれる。

許しを得て、チューリップやげんげの畑をまたぐのと入れ違いに、さきの娘が何かの稽古事か着物姿で出てきた。出てきたのと顔を合わすのと、その瞬間、膝から崩れそうなめまいの渦へ飛びこんで来たあの風呂敷——。娘は風呂敷包みを抱き、目礼してそのまま小走りに明神の翳にうすれて消えた。こーんこーん、とうしろの山に鳥が鳴いた。(十五)

これは劇的な結末であり、ある種の結論が導き出されるはずの場面である。つまり幻想としての曖昧な語りがそれなりに収斂するはずである。愕然とする「私」は知ったのであろう——たとえば現実的には、登場する娘は実在する鞠子であり、「あの風呂敷」とは新幹線で会った婦人のものでなければならぬ。そう考えればしごく簡単な話である。山田正友と新幹線で会った女性の間に生まれた娘に出食わしたにすぎない。

しかしわれわれ読み手は依然として幻想世界に封じ込まれている。なぜなら、その風呂敷が、新幹線で出会った婦人の残して降りた〈王〉と染め抜いた風呂敷なのか、あるいは幻花庵の尼さんが持っていた紫の風呂敷なのか、そしてそれらは同じものか、判然としないからである。

幻覚のなかで「あの人に返すべき風呂敷がなかった」（十三）と言うように、風呂敷は行方不明になっていた。「膝から崩れそうなめまいの渦」と記されるぐらだから、〈王〉と染め抜いた風呂敷を娘はもっていたのであろう。しかし同時に、尼さんが山田道妙という名から察せられるように、山田家と密接に関わることを考えれば、娘は紫の風呂敷をもっていたのかもしれない。このように山田家の人間関係はヴェールに包まれている。いずれにせよ、風呂敷から二人の姉妹はこの山田家の人だとわかるが、風呂敷は確定されず、この娘も特定できない。そして〈まり子〉はどうか。釈然としない部分を残し、なお作者は意図的に幻惑するのである。

## （5）幻想の二重性について

やや漠然とした図式ながら、山田家をめぐる不思議な符合に行き当たる。

登場する男性側とすれば、遺跡発掘にたずさわって問題をおこし糾弾をうけた〈某青年技師〉と、彼に協力した〈某氏〉の組み合わせである。後者はすでに見たように山田家の人物、おそらく山田正友である。では、死んだ某青年技師はどう位置づけられるのか。

女性側を考えると、山田家には姉妹がいるらしい。幻花庵の尼が山田道妙であり、紫の風呂敷を持ち、滋賀里の妹のところへ行くと言った。新幹線で出会った女性が道妙の妹と推測される。作者は、京都駅で微笑をみせた少女を見て〈まりい〉ではないかと思いついたが、山田家の十六、七歳の娘を見て「娘は風呂敷包みを抱き、目礼してそのまま小走りに明神の翳にうすれて消えた」と記し、「私」が見知ったようには描いていない。表札には鞠子という名はあるが、年齢から考えて、顔を出した十六、七のその娘が道妙尼の娘の大学生とは思えない。〈まりい〉は、京都

駅で最初見たとき感じ取ったように、新幹線で出会った女性の娘なのか。また、なぜ山田道妙が娘を産み、出家したのか、それなら父はだれか——。不確定な要素が多い。そして漠然とした謎の彼方には、遺跡発掘のあいだ山田家に「暮から春」にかけて同居したという、青年技師が浮かびあがってくる。そういえば、幻花庵を出たあの日、湖で出くわした水死体も青年を連想させる。彼もまたあのように湖に飛び込んだのか。

訳もなく、「近江の湖は海ならず、西方浄土の池ぞかし」という唄が耳の奥に聴こえた。この冬、堅田の幻花庵の部屋で覚えた今様の一節だ。(略) 鏃になった鯛の、遠い切先に吸いついた二艘の舟から「おうい」と呼ぶ声が揺れてきて、黒い影のようなものを水から引きあげていた。ああいう死に方もあるのか。痛ましいという事を忘れて私は見ていた。(十一)

宮脇修が語るように、バラ撒かれた小石が次第に意味を持ち、いたるところで光を乱反射しあい、エピソードが繋がって見えてくる。敗北の末、大海人の軍勢に追われた十市皇女の夫、大友皇子は自死した。おそらく、発掘で不祥事をおこした青年技師も悩んだすえ、自死したものと推測されるが、それがいつなかわからない。もちろん、堅田町の小学校に勤務する山田道妙が、いつから当来寺の住職になり幻花庵を経営するようになったかも明記されていない。

青年は死んだそうだが、もしかして王というのはその青年の姓ではないのか、それなら風呂敷は。綺麗だったあの婦人は——。(十五)

と「私」も想像をたくましくするけれども、これこそが作者が語ることなく、暗に仄めかした真実かもしれない。絵空事の世界に存在する人々であるが、青年が〈王〉なら、その風呂敷をもつ新幹線の女性はその妻で、娘が鞠子ということでなければならぬ。しかし発掘のあった三十年前なら、その女性は七、八歳である。このように、山田家は、明らかに〈王〉と関わりを持ち、それは幾度か散見する風呂敷が証明しているのに、山田家の当主は笑い飛ばして否定する。いつそ山田家のかつての〈おおぎみ〉と呼ばれた一族の末裔だとすれば（大友皇子と山田正友に共有される〈友〉の字が興味深い）、いくつかの疑問は解消される。しかし事實は、秘め隠され、明らかにされることはない。

一方で想像されるのは、〈まり子〉は青年技師と山田家の尼との間に密かにできた子であり、青年の自死により産まれた娘は山田正友の娘として育てられたのではないか、という仮説である。「私」と妻が崇福寺跡を訪れて、無文銀錢をもらった十年前、六、七歳の〈まりい〉は、その頃のその子だったのだろう。そして青年の死後、姉は出家して当来寺（幻花庵）に住んだのではないか、というのがもともとらしく落ち着いて見える。

言うまでもなく、この途方もない空想は十市幻想を下敷にして妄想されるものである。姉妹と云えば、十市の母親田姫王にも姉の鏡王女がいた。大海人皇子との間に、十市は「密かに」産まれたが、母は天智天皇に召されたため、生母の従兄にあたる乙等の妻に育てられた。「三歳の皇女はその後の数年を半ば狂った乙等の妻のもとで過ごさねばならなかった」と記される通り、三歳から七、八歳まで、母のいない日々を送ったのである。

十市皇女と山田姉（妹）を重ねあわせ、点対照に反転させれば、十市幻想の物語は、描かれることのない山田姉（妹）と青年技師と〈まり子〉の物語を逆照射するし、さらに真の父はだれかと問う物語さえ隠し絵のように浮かび上がらせる。

ところで、〈まり子〉が、歴史館で無文銀銭の枚数を考える「私」に乗りうつって幻惑する場面がある。

「ご存じのはずよ」

何という声を私は出したのだろう。脅えた叫びは暫くの間死時計を陰々と鳴らした。忘れてきた、いや買わずにきたはずのあの浜大津で見た粗末なおもちや包みが優しい人指し指に吊され、黙って突き出されていた。そして奇妙な微笑み。千切れんばかり私は背広のボタンを鷲掴みにして、夢中で引っぱっていた。

「東京へ行っているのよ、みな」

「東京」

「ええ上野の博物館」

私は頷いた。

「迪子さん、おげんき」

「——」

「大事にして下さるかしら」

「な、何を」

愉快そうに返事もしないでほっほっほっと白い服の少女は笑った。それからすうっと寄ってきてガラスの上へ「お忘れものよ」と置いた。

「君は誰」

「まあ」

まだおかしそうにほっほっと笑って「まり子」と名告った。僕は逃げようとした。

「待って」

待てるものか。

出合いがしらに年かきの女の人を突き飛ばしそうになった。まばゆいあずき小紋に脚が吊った。力いっぱい持った風呂敷を抛げた。(十三)

長々と引用したのは、この漢字で記されない「まり子」という「白い服の少女」は幻であって実在しない、という点を確認しておきたいためである。白い服といえば、京都駅で見た娘も「白いワンピースの若い人」と記されるし、崇福寺跡から帰る途中に出会う少女も「ワンピース」姿であった。それらの光景も幻想だったのかもしれない。十市同様の呪術を使う巫女的な幻想性を感じさせる。このように十市の影は〈まり子〉に強く投影され、「まばゆいあずき小紋」とは新幹線の女性であろう。彼女もまた幻の人に見える。

しかし、恣意的にすぎる読みは作品を逸脱する。幻想としての可能性に指摘するにとどめたい。なにより年立での成立が微妙である。すべては幻想だと言えはそれまでだが、それなりの整合性はあっているのではないかとも思う。発掘は「今から三十年くらい前」と作品にある。先の原田伴彦『近江路』では、実際の発掘は「昭和十四年の調査で、柴田実氏らによってその旧跡が明らかにされた」と明記されている。作品の発表が昭和四十五年だということを考えると、本文でも学生するとき妻となる恋人迪子と崇福寺跡を訪問して、六、七歳の〈まり子〉に会うのは十年前である。したがって現在、彼女は十六、七歳であり、誕生は発掘時から十三、四年後でなければならぬ。作者の「自筆年譜」<sup>(注8)</sup>によれば、昭和三十二年に「保富迪子と婚約」とあり、また十四章で「二つとはならない男の子」が「息子の建日子



もちろん、道妙尼のかわりに、新幹線の女性を置き換えることも可能である。むしろその方が現実的である。彼女を年立てに組み込めば、発掘当時の三十年くらい前は七、八歳であり、たとえば十三年後に二十一歳で鞠子を産む。今から十年前その鞠子が六、七歳のころに、「私」と妻が出会い、あの無文銀錢をもらった、というのが現実なのだ。このように、十市幻想を反転させることで見えた、道妙尼と青年とまり子の物語は、さらに反転させることによって、新幹線の女性を中心とした元の現実にもどる、という幻想の二重性が、「私」の〈現実〉のなかに拮抗し、時には二重写しに存在する。さながら浜大津で買った「おもちゃ」の、近江八景の絵がぐるりと裏返せば中国の風景が出てくるような「手品」である。すなわち視点を「道妙尼」に置く年立てと、「新幹線の女性」に置く年立てとの二通りの構図であり、それは幻想を生む世界と、日常に立つ世界である。その間で「私」は幻惑される。〈鞠子〉は実在するが〈まり子〉は幻影である。道妙尼の履歴はなお想像するほかないが、おそらくこの作品は、そのような何の変哲もない日常と、幻庵など「冬の堅田以来の十市幻想」の世界との対比を読むべきなのだろう。その世界では、「私」と妻が無文銀錢をもらうのは幻の事件であった。あの日現れた「六つか七つの子」は崇福寺跡に宿る幻影でなければならぬ。松の陰に宿る幻影である。尼の娘（大学生）も幻想的にしか存在しない。幻庵で聞いた深夜のピアノの連弾も「私」の幻聴でしかない。だから「膝から崩れそうなめまいの渦へ飛びこんで来たあの風呂敷」という末尾近くの一節は、「私」が幻想の世界から現実突きもどされた一瞬でもあったのだろう。「こーんこーん」と鳴く鳥の声は寂しい。

——そのような幻想の落着に一息ついた読み手は、ふと気付くにちがいない。主人公の「私」は確か、山田太郎の家の「ふく」を実母とすると記されていないか。か。「私」の親さがしは、この山田家の系譜に巻き込まれているのだろうか、知ることの脅えはそのことと関係するののか——あやかしに似た混乱にふたたび襲われ、読み手は困惑する。



なにせ作品全体は、「私」の友人の黒田が、〈王〉と染め抜いた綺麗な風呂敷を見ながら言った「君は今でも実の親を知りたいのか」という、幼年期の不安と願望に通底する〈親問い〉の感情に広く覆われているのだ。それは終始、「私」が〈まり子〉の幻に脅えることにも関連する。なぜ知ることにも脅えるのか。作者が曖昧な言説のなかで、突き詰めて人間関係の確定を避け、血縁を特定しないのは、そうすることへの不安や躊躇のあらわれであろう。<sup>注9</sup>このようにして幻想の物語は、また冒頭へ回帰する形で、あやかしの連環は閉じられるようである。

## 注

注1 『秦恒平・湖（うみ）の本3 秘色（ひそく）・三輪山』（一九八七・一）

注2 原田伴彦『近江路 人と歴史』（昭和四一・三 淡交社）。なお、「淡交」掲載の近江大津京関連の記事については、同社編集部にお世話になった。

注3 進藤純孝「男女の出会い、人の心——秦恒平著『秘色（ひそく）』（『東京新聞』昭和四五・六・二九）

注4 進藤純孝「底に流れる『生』の寂しさ——秦恒平著『秘色』（『中日新聞』昭和四五・六・二四）

注5 桶谷秀昭「みがきあげる欲求——伝統に直面する詩精神 秦恒平著『秘色』（サンケイ新聞）夕刊 昭和四五・六・二九）

注6 笠原伸夫「正系の美意識——王朝文学的な感覚に圍繞されつつ 秦恒平著『秘色』（『日本読書新聞』昭和四五・七・一三）は、「それにしても、このような王朝的な美意識の正系にたつ微妙な感受性を全面に押し出した作風は現代文学にあつては、たしかに異質で、〈正系〉そのものであるがゆえに、異相、異形とみまがうような背理を示しているのは、なんとも興味ぶかいところである」と述べた。

注7 鶴岡冬一「幻想を焦点に——際立った素材の面白みも 秦恒平著『秘色』（『図書新聞』昭和四五・八・二二）

注8 秦恒平『四度の瀧』（昭和六〇・一 珠心書肆）所載の「年譜」に拠る。

注9 上田三四二は『清経入水』（昭和五一・一二 角川文庫）の解説のなかで「秦恒平の作品における夢幻感はこの出生の曖昧さからくる存在の不安に原因している」と指摘した。

〔付記〕本文中の傍線は引用者による。また引用文に付した数字は章を示すものである。

（ながえ ひろのぶ・近代文学研究家）